

アトリエ 琉游舎 だより 163号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年10月12日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

秋は金木犀 夏に梔子 春の沈丁花

- よい香りを漂わせる花たちの中でも特に香りの強い沈丁花（ジンチョウゲ）梔子（クチナシ）金木犀（キンモクセイ）は「三大香木」と呼ばれています。春は沈丁花、夏は梔子、秋は金木犀と咲く時期が分かれ、それぞれの季節の到来を花の香りが告げてくれます。
- 朝玄関の扉を開けると朝の冷氣よりも先に金木犀の香りが秋の訪れを私に告げてくれます。お彼岸を過ぎて戸外には一斉に金木犀の香りが漂い始めました。長く暑かった夏がやっと終わり本格的な秋の始まりです。いままで20度以上あった朝の最低気温も一気に10度まで急降下しました。高めの地温に躊躇して蒔く時期を遅らせていた大根も発芽しました。布団も夏用を片付け、そろそろ炬燵を引っ張り出さなければと考える気候です。
- 私たちは自然の変化で季節の推移を実感するのですが、今年の気候はいつもと違うと感じていても、暦通りに毎年自然は変化しているようです。今年もまた彼岸花は彼岸に咲きました。ミョウガは彼岸の中日に収穫しました。金木犀も彼岸が終わると一斉に芳香を漂わせました。日記を繰ると2、3日の前後はあっても毎年同じような日に同じ事が記載されています。人間が心配しなくても自然は各々にセットされた時計に従って生活しているようです。
- 目に見える光景や耳に届く音よりも鼻を刺激する香りの方がいち早く脳に判断を迫っているようです。視覚や聴覚が秋を知らせるよりも早く、金木犀の香りが嗅覚に届き脳に情報を与えました。状況判断するときの本能的な機能は嗅覚の方がより適しているからのようです。
- 自然の香りを嗅ぎ分けることは快不快を問わず、生き物が生存していくために必要な能力なのでしょう。目で確認するよりも早く、匂いで害無害・好悪・善悪を判断しないと、敵に襲われることも、腐ったものを口に入れてしまうこともあり生存に関わってしまいます。
- 最近消臭剤流行りで、回りから人に不快や刺激的な匂いが消えて芳香剤の香りだらけです。不快な香りが消えると同時に、人間の本能的な判断力も消えてなければよいのですが。

9月・10月スケジュール

月 火 水			12	13	14	15
16	17	18	映画会 13時半から			
19	20	21	映画会 お休み		22	
23	24 読書会 13時半から	25	映画会 13時半から	27	28	29
30	31	11月1日	2 映画会 お休み	3	4	5 写経会 13時半から
6	7	8	9 映画会 13時半から	10	11	12

読書会

10月24日
(火) 13時半

写経会

11月5日
(日) 13時半

映画会

10月12・26日
11月9日 (木)

昭和33年生まれの私は、まだ戦後復興の匂いを残しつつテレビや冷蔵庫などの今どこにでもあたりまえにある家電製品が少しずつ各家庭にそろい始めた成長期の日本とともに幼少期を過ごしてきました。校舎や机、椅子は戦後すぐの新制学校制度が始まったときのままの木製の作りのもの。体育館はなくプールもやっと小学校卒業間近に完成、すきま風だらけの教室の冬は石炭ストーブでしのぎ、夏は窓を全開にして授業を受けても、運動中の水の補給を禁じられていても、誰も熱中症で倒れる生徒がいない環境で逞しく育ちました。まだ不登校や授業中に歩き回る子供や親の対応に先生が追われることもない、学校が社会から敬意をはらわれていた時代です。学校中に当たり前のように存在していた、朝礼、整列、行進、挨拶、校歌、敬意、規律、競争、順位、顕彰などの数々が、私の社会的行動や人格を形成してきたのではないかと思えることは、高齢者のノスタルジーや昔は良かったの繰り言に聞こえるのでしょうか。一人一人の頑張りが個々の能力を引き出し、その集積が社会の成長をもたらすと考えられた時代に育ってきた私の世代は、競争や規律、評価、敬意が時代にそぐわないものとして排除されていこうとする現実とともに社会から引退を迫られているかのようです。

毎月私のもとに地区の小中学校の「学校だより」が届きます。かつては地域コミュニティの一つの括りである小中学区の中核であった学校は、年々希薄になっていく地域住民との関係性を辛うじて保つためのツールの一つとして、学校と直接関係ない私のような世帯にも今の学校の姿を届けてくれているのでしょうか。昔はがり版刷りであったものが、今は写真もふんだんに使いカラー印刷です。毎月読んでいますが、仕様の变化とともに内容も変化したように思われます。教員の皆さんが熱意と方針をもって教育に当たられ、子供達もそれに応えて学校生活を送られていることはよく分るのですが、何か大きなものが消滅してしまったような印象を今までずっと拭い去ることが出来ませんでした。ひとりひとりの子どもたちや先生方の肉声や温もり、いわゆる学校生活の喜怒哀楽がきれいさっぱり消毒されて生き生きとした実在感や人の感情が紙面から立ち上がってこないのです。その訳が昨年まで小学校の講師を長年務めていた妻の指摘で氷解しました。その記事は地区新人大会の結果のお知らせです。写真と成績は掲載されているものの、肝心の名前が記載されていないのです。彼らの努力は「名無しの権兵衛」として数字（順位）のみが報告されているだけです。

「頑張りました！」と書かれていても、「よかったね、これからも努力しようね」という励ましや期待、喜びがこの誌面を通して当の本人に伝わるのでしょうか。もしこれが「学校全体で頑張りました、賞に入らなかった人も参加者全員頑張ったので、皆でその努力を称えましょう、個人を顕彰することは負けた人への配慮から控えましょう」と言うような趣旨ならば、そこから人は前に進もうと考えるのでしょうか。努力する権利は全ての人に平等に与えられなければなりません、その努力の結果は様々です。それぞれの努力の結果には喜怒哀楽がついて回ります。喜怒哀楽は人に前進する力と達成への意思を与えると私は考えます。喜怒哀楽のエネルギー量が個人、集団、社会、日本の活力の多寡を決することになるのではないのでしょうか。

仏教の目的は「苦」から自分自身を解放することです。「苦」は煩惱、つまり貪欲（むさぼり・欲）瞋恚（怒り・憎しみ）愚痴（おろかさ）の三毒が因となってもたらされるものです。仏教の修行の目標はこの三毒を滅して心安らかな状態にたどり着くことです。これが悟りの境地です。しかし親鸞聖人が看破しているように人は罪悪深重・煩惱熾盛の存在です。どうやっても生きていく限り三毒から逃れられない生き物です。本来悟りの境地を示す「涅槃」が肉体的生の消滅を意味する理由はここにあります。仏教は三毒を滅することのできない人間の存在を悲観することでもなく、断念することでもなく、抵抗するでもなく、それをありのままに受け入れて、安らぎの処（涅槃・悟り）へと向かって日々を生きていくことを実践するための宗教です。日々の中で引き起こされる感情の波（喜怒哀楽）を、日々を生き抜くための様々な意志や行動のエネルギーに転化して、喜怒哀楽の波が荒れ狂い三毒の海に溺れることがないよう、安らぎの処へ導いてくれる宗教です。喜怒哀楽は生きていくことそのものです。それを取り除いてしまったり、人は肉体の生存はあっても感情は死滅しているのです。もしこれが三毒を滅した末の悟りの境地にみえたとしたら、これは仏教ではありません。物質・肉体面の働き（色）と心の働き（心）は不二、一如です。色心不二なるが故に喜怒哀楽とそれがもたらす行動は不二です。これが私たちがこの世に生きていくということに他なりません。

感情（心）は荒れ狂う波のようにのたうち回り、荒れ狂い、時には自身をも傷つけ人に害を及ぼすこともあるでしょう。それば罪悪深重・煩惱熾盛であること、人であることの証です。しかしその波を感情のままに任せっきりにししないのもまた人です。互いの感情の波の接触が異化から同化へ、反から合へと転化させていく過程が私と他者、私と社会との関係をつくることのはずです。その波の境目でその波をありのままに観ることができたならば、「喜」は前進へ「怒」は和解へ「哀」は同情へ「楽」は共有へのエネルギーへとそれぞれが転化されていくはずで、それは仏の慈悲そのものです。慈悲のエネルギー源である「喜怒哀楽」をオブラートで包み、消毒してしまった社会からは、まず子供たちの歓声や喧嘩の声が聞こえなくなってしまうのではないのでしょうか。「学校だより」の一記事からのこの記述が私の誤解で、[琉游舎：戸井 出琉・恭子](mailto:toi101izuru@outlook.jp) 杞憂かも知れませんが、また蟻の一穴ということもあり得ます。「喜怒哀楽」[問い合わせ：0287-53-7848](tel:0287-53-7848) [08033508152](tel:08033508152) を表さないことが思いやりや、平等や人権尊重のためともし社会が判断して[矢板市大槻2319-17](tel:0287-53-7848) [コリーナ矢板C-850](tel:0287-53-7848) いるならば、それは安らぎの処と真反対の極北に向かって行くことになるでしょう。[メール：toi101izuru@outlook.jp](mailto:toi101izuru@outlook.jp)